

江戸時代の油屋

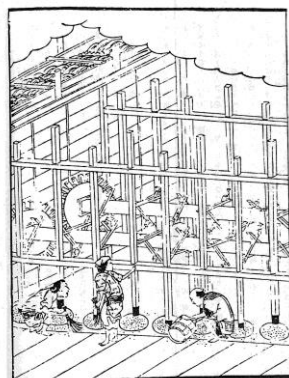
江戸時代中頃には、^{なたね おお う}菜種が多く植
^{なたねあぶら}えられ^{ひと}菜種油を作る人が増えまし
 ました。野々市村を含む石川郡は、土質
 と水はけがよいため菜種作りに適し
 ていたためです。^{でんき}電気の^{えど}ない江戸
^{じだい}時代、^{あか}油は灯りをともすために使わ
 れる大変貴重なものでした。そのた
 め、野々市でも油屋を営む家がみら
 れました。

しかし、^{ばくまつ}幕末頃は油屋経営が難し
 くなったようで、油屋から他の業種に
 転換している例がみられます。



びんつけ ろうそく
 「鬢附・蠟燭 木倉屋長右衛門(金沢)の引
 札」明治17年(1884)

江戸時代、野々市の与三右衛門という人が
 金沢の木倉屋に油を卸していました。



菜種油は、水車を用いて菜種をひき、粉にし
 たものを絞って作られました。
 (『製油録』より)

約100年前の本町3丁目の通り。油屋から
 宿屋に変わった「御宿きや」の看板が写っています。

